様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　8 日現在

機関番号：14401
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：23820028
研究課題名（和文）　ハワイ語を含む多言語データの相互行為分析

研究課題名（英文）　An interactional analysis of multilingual conversational data that include Hawaiian and other languages

研究代表者
古川　敏明（FURUKAWA TOSHIAKI）
大阪大学・大学院言語文化研究科・講師
研究者番号：90609372

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は危機言語の再活性化運動の成功例として論じられてきたハワイ語研究に相互行為の視座を導入することである。ハワイ語あるいは英語中心に展開する多言語会話を対象にして、会話の参加者が何を成し遂げたか分析した。その結果、分析者の視点からすると、複数の言語の要素を含んでいるように思われる発話行為であっても、会話の参加者は言語要素の切り替えに毎回、意味づけを与えるわけではなかった。つまり、主にハワイ語に帰属する資源を用いて話し続けて英語の要素を織り交ぜることも、その逆も、混淆した言語実践であり、参加者の視点からするとどちらも「ハワイ語する」ことであると結論づけられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study is to introduce an interactional perspective into research on the Hawaiian language, which is one of the most successful cases of endangered language revitalization. I examined what participants achieved in multilingual conversation that can be either Hawaiian-dominant or English-dominant. I found that the participants did not necessarily respond explicitly to language switches that the participants made between what, from the researcher's point of view, are individual languages. In other words, using English resources while speaking in a Hawaiian-dominant variety and vice versa is, from the participants' point of view, a hybrid language practice that I refer to as "doing Hawaiian language."

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2011 年度 | 300,000 | 90,000 | 390,000 |
| 2012 年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：ハワイ語、相互行為、談話分析、会話分析、多言語データ

## １．研究開始当初の背景

### (1)　危機言語

生物への多様性と言語の多様性の緊密な関係に着目した危機言語のドキュメンテーションは、言語理論への寄与や言語共同体への支援という側面を持ち、言語学者にとって重要度の高い仕事となっており、ドキュメンテーションの試みの結果、文法書、辞書、物語などのテクストが生み出されてきた。しかし、特にテクストの構築においては相互行為への視座が弱いことが課題となっている。

### (2)　ハワイ語の文脈

同様に、談話レベルの分析は危機言語のドキュメンテーションが抱える課題である。危機言語の再活性化運動の成功例として知られるハワイ語のドキュメンテーションにおいても、母語話者へのインタビューを収録した映像や録音が生み出されてきたが、談話レベルの分析に進むことはなかった。映像や録音は文化知識を抽出する資料とされ、稀に文字化された映像や録音は相互行為としての本質が消されたモノローグの様相をなす。また、危機言語研究において、日常生活場面とは異なるメディアという非伝統的な制度的文脈における言語使用を調査する必要性も指摘されている。

ドキュメンテーションの実践に新たな道筋をつけるには、ハワイ語の会話データを相互行為として表記し、分析する必要がある。研究代表者は多言語社会ハワイをフィールドとし、相互行為の視座から談話・会話分析を行い、ハワイ・クレオールと英語などの言語間及び変種間の切り替えを含む相互行為を分析対象としてきた。同様の手法を用いて、ハワイ語使用に関する予備的調査を試み、メディアにおけるハワイ語を含む多言語会話の相互行為分析の準備を整えた。

## ２．研究の目的

### (1)　相互行為への視座

本研究の目的は危機言語の再活性化運動の成功例として論じられてきたハワイ語研究に相互行為の視座を導入することである。言語文化の保護保存のために実施された母語話者へのインタビューなどを談話テクストを構築する相互行為として捉えなおした上で分析を行い、相互行為中で会話の参加者が何を達成しているのかという点に留意し、最終的には言語理論への寄与と言語共同体への支援を深化させることを目指す。

### (2)　メディアにおける言語使用への視座

また、メディア、特にテレビやラジオといったマスメディアにおけるハワイ語使用の分析を行う本研究は、言語の再活性化を後押しする意味を持つ。非伝統的な領域におけるハワイ語使用を分析することは、危機言語研究からの要請でもある。

## ３．研究の方法

### (1)　微視的アプローチ

ハワイ語を含む多言語会話データを分析する上で、相互行為中の関連性と帰結を基準とする微視的なアプローチを採用する。多言語会話で参加者が何を成し遂げるか分析するために、会話分析の問題意識を通じ、相互行為の参加者たちのふるまいにおいて可視化される言語の境界に着目する。つまり、言語学者が想定してきたハワイ語が、相互行為中において特定される会話参加者の視点からのハワイ語と同じであるかを検証する作業となる。データに登場するほぼすべてのハワイ語話者がハワイ語に加えて、ハワイ英語やハワイ・クレオールを自由に操る多言語使用者であるため、データ分析には民族誌的な知識を利用することが不可欠である。

### (2)　具体的手順

以上の方針に基づき、平成 23 年度は既存の録音資料と文字化された資料を入手し、文字化資料の精密化を行い、データベースの構築を進めることを目指した。事前に確認しておいた通り、ハワイ州のビショップ博物館のアーカイブスでは博物館の研究員がハワイ語の母語話者に行った 1960 年代のインタビュー録音と文字起こしされた資料が購入可能であったので、録音と文字資料を数点入手し、文字化の細密化、データの分析、コード化を進めた。

ところが、平成 24 年度もデータベースの構築を継続し、データの分析、分類・類似例の収集、そして一般化を目指して年度初頭に現地調査を行っていたが、博物館が前触れなく所蔵資料をめぐる規則の大改訂を行い、その結果、資料の追加購入が不可能になっただけでなく、既に購入した録音資料を研究に利用することまでも制限する趣旨が通達された。1 年目に行ったデータ分析により得た知見は、その後入手した新たなデータの分析に非明示的にだが活かすことを目指した。

### (3)　データ

このため、使用データに関する計画の変更を余儀なくされ、既存の文字起こししたデータは存在しないものの、当初予定していたインタビュー録音と類似している 1970 年代に放送されたラジオ番組「カ・レオ・ハワイ」におけるハワイ語中心の会話データを追加入手し、研究協力者からの協力も得て、4 番組（4 時間）分の文字起こしを行った。また、英語中心の別のインタビュー録音（文化保存

を目的として 1978 年に収録）やテレビ番組の映像（2010 年に放送された文化イベント）を対象として、多言語会話データの文字起こしおよび分析を実施した。

４．研究成果

(1)　主な成果

①　「ハワイ語する」

分析者の視点からすると、複数の言語の要素を含んでいるように思われる発話行為であっても、会話の参加者は言語要素の切り替えに毎回、意味づけを与えるわけではなかった。つまり、主にハワイ語に帰属する資源を用いて話し続けて英語の要素を織り交ぜることも、その逆も、混淆した言語実践であり、参加者の視点からするとどちらも「ハワイ語する」あるいは「われわれのことばする」ことであると結論づけられる。

ラジオ番組「カ・レオ・ハワイ」は番組パーソナリティーのラリー・カウアノエ・キムラが年配話者のゲストやリスナーと行う電話会話を軸に展開するのだが、ハワイ語だけで話をしているかと思えば、ハワイ・クレオールと見なし得るリソースを織り交ぜていったりする。しかし、番組参加者たちはあくまでも「ハワイ語している」のであり、明示的な言語の切り替えをしたと互いに見なすことなく、会話が進んでいくことが確認できた。

一方、2010 年のテレビ番組では、文化イベントの司会者 2 人がコメンテーターと 3 人で英語中心の会話を展開していく。分析者からすると英語中心の会話ではあるのだが、この会話の参加者たちはハワイ語の語句や文を織り交ぜ、「われわれ」としての語りを展開している。つまり、会話の当事者たちにとっては、利用可能な手持ちのリソースを動員することが「先住ハワイアン」として語るということであり、そのように語ることが相互行為上、重大な帰結を齎すのである。

②　多言語データの表記

また、本研究の成果として、会話データの表記に関する示唆が挙げられる。本研究のような多言語会話データの分析を発表する場合、会話の参加者のエミックな視点を論文に掲載する抜粋データの表記に反映させるには、たとえばハワイ英語の借用語であるハワイ語とそうでないハワイ語との表記上の区別を行うなどデータの多言語性に配慮した工夫が必要になってくる。データには複数の言語と変種のリソースが含まれているが、会話の参加者にとって関連性があり、帰結のあったリソースをそれとわかるように表記することにより、多言語データの会話分析の方法論に貢献できるのではないかと考えられる。

(2)　国内外における本研究の位置づけとインパクト

国内ではハワイや言語関連に限らない広範なテーマを扱う学会や研究会で研究成果の報告を行った。言語のドキュメンテーションにおいて談話レベルの分析を重視する観点やハワイの多言語性について、新規性のある話題を提供できたといえる。

一方、国外においては、特にハワイ大学を中心に研究成果の報告を行ってきた。多民族社会のハワイであっても、ハワイの多言語性に着目した研究は決して多くなく、また、ハワイの多言語状況に着目したように思われる研究であっても、ハワイ語、ハワイ・クレオール英語、英語というように、どれか個別の言語についての研究であることが多い。本研究はそのような現状を鑑みて、ハワイ語話者の多言語使用能力を強調するとともに、「ハワイ語する」ことが英語やハワイ・クレオールのリソースを動員することと不可分になって実践されていることを明らかにした。2 年間の成果は平成 25 年 9 月に国際語用論学会のパネル（「多言語使用者による物語」）の一部として、発表を予定している。

(3)　今後の展望

以上のように、本研究は言語の不均質性や異質性という視点から言語と言語行動の理論の再定義に貢献する試みである。多言語会話データに登場する相互行為者たちの明示的・非明示的な志向性を基準にするという分析上の原則に従って微視的な分析を行うことにより、相互行為中で関連性と重大な帰結を持つふるまいを特定するということは、ハワイ語が研究者から言語共同体の元に帰属するという意義を持つものである。

本研究で先鞭を付けた問題の多くは、引き続き平成 25 年度の若手研究（B）として採用された「ハワイ語ラジオ番組の相互行為分析」のプロジェクトとして展開させていくことになる。研究活動スタート支援のプロジェクト（「ハワイ語を含む多言語データの相互行為分析」）ではラジオ番組は分析対象の一部に過ぎなかったが、このプロジェクトの実施を通じて、ハワイ語再活性化におけるラジオ番組の重要性を理解するに至ったので、今後はラジオ番組という非伝統的な領域におけるハワイ語使用を主たる分析対象とする。ラジオ番組の録音データを体系的に文字起こしし、分析することによって多言語性、不均質性、異質性に関する考察を深化させていくことになる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計４件）

① 古川敏明、「ハワイ語する」：メディアにおける会話データの相互行為分析、ハワイ研究会、2013 年 1 月 15 日、東京大学
② 古川敏明、英語とハワイ語の混淆コード:ラジオ番組におけるハワイ先住民の言語実践、日本英語学会、2012 年 11 月 10 日、慶応大学
③ 古川敏明、Unpacking occasioned geosemiotics: An analysis of place reference in Hawaiian language radio shows、ハワイ大学第二言語研究科木曜セミナー、2012 年 9 月 20 日、ハワイ大学、アメリカ
④ 古川敏明、Taking a discursive approach to language documentation: The case of Hawaiian、ハワイ大学言語学研究科火曜セミナー、2012 年 4 月 3 日、ハワイ大学、アメリカ

〔図書〕（計１件）

① 古川敏明、明石書店、第 42 章ハワイ語とピジン（山本真鳥・山田亨（編）『ハワイを知るための 60 章』所収）、2013、254-258

〔その他〕

① 古川敏明、ハワイの神話：ペレとヒイアカ物語、ワールド・インビテーショナル・フラ・フェスティバル日本大会ハワイ文化講座、2012 年 9 月 17 日、文教大学

② 古川敏明、ロコの声：ハワイの英語、ワールド・インビテーショナル・フラ・フェスティバル日本大会ハワイ文化講座、2012 年 9 月 16 日、文教大学

③ 古川敏明、ハワイのことばと文化、丹後通学圏府立高校合同大学見学会　大阪大学大学院言語文化研究科ミニレクチャー、2012 年 4 月 30 日、大阪大学

④ 古川敏明、ハワイでは何語が話されているか、京都府立嵯峨野高等学校アカデミック・ラボ「英語学：社会言語学」、2011 年 9 月 30 日、京都府立嵯峨野高等学校

⑤ 古川敏明、ハワイ語、ワールド・インビテーショナル・フラ・フェスティバル日本大会ハワイ文化講座、2011 年 9 月 24 日、文教大学

６．研究組織
(1)研究代表者
古川　敏明（FURUKAWA TOSHIAKI）
大阪大学・大学院言語文化研究科・講師
研究者番号：90609372

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
土肥　麻衣子（DOI MAIKO）
ハワイ大学・大学院修士課程修了
研究者番号：なし